町人囊

一

108
1

門口仁
號 108
巻 1

町人嚢序

聞さてはゆ捨しかしども猶〳〵籠耳の
底にのこりし弘法ぐに捨置るもの本意なくて
のはかさわらめ行りぬいさら身ふれなをそ
とふしものゝと家童子にあて人夢畫ばしの眠
さ法しふもがれ土器のうち捨よも閑寂ゝやされば
学問い乞食ぶく法ようふ何もかをとうこゝみ
置くさて撰い用ゆへしとて玄旨法門はの法
ひ置し此ことゝ知ひ出ゝ町人袋とうらく
世俗乃糟粕をいのもうとうるをこゝみ置てうまく

り撰びもらひんとてとりどゝ素より愚みはさ
なれ身なれば撰ひ用ゆべきもの多く
袋乃底より醵くべく成れ集めしこは葉の
多も撰ひ事をとゝのひどんい何の用ようなべ
きと我ものゝおりくて分別囊乃ひとへ庵
ねをやとれる處をせわくの多ひぐさうもと
物はずやくもいとかいゆれわざになを
おとしこうけえさるのれれてこれ
長濟　西川求林齋書

町人囊巻一

或人の云町人よ生れて甚みちと樂をんと思ひ
すん町人は品位をもまた町人の町人たる理を
知そのら甚ゑ正し甚身をれさ為べし
いりかくいつよ聖人乃書紙考ある丹人間り
立りの品位あり是を五等の人倫といひ
第一よ天子第二よ諸侯第三よ卿大夫第
四より士第五丹庶人より是を日本ていよ
くれい天子い禁中様諸侯い諸大名高卿
大夫い旗本官位の諸物頭士い諸旗本

官の名也公方様ハ禁中様に次で諸侯の主る故に公方家の侍ハ五位たりといへども生れながら六位に準じ給ふ例なり公方家の侍の外ハ諸家中をすべて陪臣といふなり又門の侍いづれも浪人ハうちなりとしるべし其内一国の家老たる人ハ諸侯の大夫なれバ公方家の侍に準ずべし其外国々の諸侍扶持切米の面々いづれもみな浪人なり故浪人に四つの品あり是を四民と号す士農工商これなり士ハ右にいふ諸国又内の諸侍なり農ハ耕作

人なり今ハ是を百姓と号す工ハ諸職人なり商ハ商賣人なり上の五等と此四民ハ天理自然の人倫にして此四民なきときハ五等の人倫も立ことなし此故に世界萬国ともに此四民あらずといふ所なし此四民の外の人倫をバ遊民といひて国土のために用なき人間なりとしるべし此四民のうち工と商とをわけて町人と号するなり古ハ百姓より町人ハ下座なりといへどもいつ比よりか天下金銀づかひとなりて天下の金銀財宝みな町人の方に主どれる事にて貴人の御前

へども万事さうく事もあれどいつくにても品百姓の上なるゆゑ仰ぎ咒や百辛の味い天下静謐の御代なる故儒者醫者神道者茶湯風流諸藝者多くい町人の中より出来たることゆゑ水い万物の下にありて萬物をうるおし居ながら町人い四民の下に位して上五等の人倫より用ありて世をすくふ故なり世間相ろはゑ陸こゝゆ身の幸にあるどやうに上ともの位他の盛物ある故義まず簡略質素を守り分際より安んじ半い半づまに樂くをべ一生に樂くを畫

事あるべしこれ天理なる耳にぐまれる始なり

ある人のつゝましい町人に常に守るべきい謙に一字なり謙とつゝましい人よ態勤と書と紙のくいつゝ

ゆゑに天理をおそれ神をもひいろる謙のみち是聖人の易よりこれ物を作りしに天道い盈るを虧て謙に益と地道い盈る紙変して謙に流鬼神い盈る紙害して謙に福とこのつゝましい有ゆゑ物をつゝしむ事也町人よりさつに貴き賤さとしたる人さつたり盈るい傲ゝり傲ハ萬悪に基ゝるゆゑ欲をうすくして盈る事

あるゝまじゝ事
歳学者のいつかいつゝ四民おのゝ長業と可
はゝて相ゝぐゝ事なりし近代い百姓職人
いづれも高貴となりて武士にも劣りて高貴ゆ
ゆゝ新のゝ事ゆゝ又ゆゝふゝて支高乃みちゝハ
金銀をもつて物を賞ゝ利徳をうまを所
事ゆのゝつよゝ高の字れ名い高量ゝつひて
物の多ゆ好悪をはりけうて用ゆゝ利徳を
得るハみな是高乃新なりつゝへい金銀をつゝ
事なくて唯ゝの物ゆ易ゝうゝと

易ゝいゝ都て物の多ゆ高下と量損益と考
へ多高利をとゝ多なくゆ所ゆ物ゆ出なれ西
乃物ゆゝ我国の物を持行て人乃国乃物ゆゝて
天下ゆ財物を通じ国家の用を達ゝ真の
高人ゝいつゝ末代ゆ町人ゆ是ゆりて人乃
貝ゆゝ成ゝ為ゝ賞ゝ貴の類ゝ天下ゆ
毒蛇ゝ若幸ありて富と得ゝとつゝ浮
名ゝ雲のごゝくゝて久しゝ沢や町人ゆ
あゝざる人をゝ謀計ハ眼前の利潤ゝとゝ
ゝと神明の罰ゝあゝゝ

ぶらに事なりし語られし

町人多く集りて咄をる中に一人のいろい侍の仕さ
く学者の学者なくて味噌汁のみそをなめいまる
しこう人い一人れ富者のいろい歯てふたれまて
仕方を去りて町人い町人ならぬことよりく仕りの
をしいたれ是もあるいりかりられ

或人の曰去商人常のにくふ商人と屋風を
曲まひいそしいてしいてしいてしいてしいてしいてしいてしいてしいてしいて
あるいれ家の年久しいて右屋風の精妖て商人
乃夢ふるていくく年ぶるれと曲ものと

のく思ひのふくそ口惜く仕まゆがりて毋そるは我
ふるわびのふくらびしくそ口ぶ徳用をれ去ら仕
強て用きのぶる何い片時もそらぶ上みくみらぶ
ひのるる何いれひんるそぶ上のぶくらぶしの中
道をう居ふれい久しくそるく危くびるのうく三西
乃地平う小平くそて毋てざれい則ふらぶること
まう是第一の用ふるう主も先るの一心乃地を
をいるう小正くそるく且て上て高賣れのべらぶ紙
考てあるう小用うどなのまうふらぶらどして結狂
う身をそるるれいつまで立ても危るまるう

へし主此てこうとをうてゆがうこうとの
ゆくゑ得ぬ人口惜くはらうと恨くうこうやおうき
事おぐ〳〵し捨ぐてたこと口うはうこうや
ある人のを驕ふものくしかくしかくこうて中れて町人
か多き事也驕ふこうて法ちふ財寶と費し
先ゑをのこうてあぐろうこうれて町人の分際に過
ぎうよそやいとおをう紙驕といつぐ〳〵況や過奢
風流の遊び〳〵おあてやう微ハ兼悪汁基やうや
ちうけけはぐこう是ちうを紀まう易こ云負て且
業冠乃到ふこう紙致と負うけ吝しとあう

員て業こう人足ぐ〳〵紀賊ち風情なうぐ荷物ふ
員おぐ〳〵輿車に乗府ハ盗人の業こうを富貴なう
者こ却ひ紙て物紙奪ひうる事あう是みを此
方ち冠をまつき致をる迚ハやき町人結搖なう
衣裳ちて遊ふこう出く追こだこうをてうをぐひうう
下賤の身こうて上ぐ法なう人のこうをひと紙ちう府
ハ冠乃まぐひいこうべ〳〵ぬこう人貴惠才覚あうて
行儀作法こう紀人家〳〵身乃分際町人乃位と紀
ぬ人ハ冠まちう是と貞ゆ仕ぐて吝しとハいこう
又いく藏を慢ろハ盗こう論ち也容紙治ハ濫

う論らなりといへり庫内の財寶をも常に用ゐる
くて守りを懈ることなくい此方より盗人よねとわし論ふ
ものなり女人をの勝まして姿容とうはくく浴へい
淫乱なる男に此方より我といざなひ切なと論ふ者
なり其ごとく小町人をのおのおのいかき位家をと
知どして分際をるて風儀過ぎ紙ふるまふべい
皆此のまて禍とす稱くも禍福門なし唯人の
うるまく結くとして結くて諸〻紙〻
盛学者の云易け諸〻善も積ざれい名紙ることふ
なれば悪もつまされい身をわるはとふ立べく

いつとあり行ふ者ふ紙得なる人りかなるや悪し大
悪なれい身とわるはとまかるとなるれいざ
なるるるるるる小悪あり大悪く知るいて紙なるなの
らん況や大悪とや小悪といいても時の運によりて
一旦なりて為ることあり何ぞ積て紙
海ん山や名人運ならて為ることあり
いつとし結ふあまい紙ようつざらひく家く身をはろ
かり家と先ず人云ふ人い小善紙もって益なりとて
ものと小悪ともって傷ってれとなてけるを敬ふ
悪結って掩ってすは是聖人の所なるなり又曰

積善の家ハ必ず餘慶あり積不善の家ハ必ず餘殃あり孔子の印識なり臣君を弑し子父
をころすこと事一朝一夕のゆへにあらず甚由てきたる所のものなり漸くなりしゆへ君を弑し父を
悪しきものの始ハ僅なる一念の悪なりしかるに甚悪念漸く廣大に到て終に弑逆の悪逆
一朝一夕の不善なるにあらず積善あるゆへ小善といへども積善
久しけれハ必ずあるべしとなり積不善ハ小悪といへども積
積といへあるべしなり千度百度のことにはあらず

二度三度ともに是積とこそいへ況や千度百
度をや霜を踏ぐ堅き氷到るべしなり悪も小
悪別大悪となる也度々霜を踏て終に堅
き氷となるものなり俗にいへる有ごとく事
なり又古語に泥江始に鰌を捕ん為に入ていにしへ
ありとかやいつの世にかこの清き水も積りくて
難となる国なれハ泥江にて底なき深き水と
なりし古郡川なりの水も終にあさき川の蘆の雫萩
の下露にとなるなり同じ心なるよしなり
賢人の云清水に魚なしといへるごとし家語云

書の中に水至て清きときは魚なし人至て察
るときは則徒なりと古より世の諺も是をやいかい
らんとさしたる此語いかに別義なり人のあるふ
才智をもて物毎深察緊密なる所ゆえ友うしすく
れ一国の掟をもあまりに法をもとめ行儀つ
よきゆえ萬人をはぐくみて清きをもて
到の字れ公はきれとなりて考るの小解と書ぐ
こゝとのあひしも是をもんぐ町人をもの公儀の
掟のすじ緊密なる所ゆえ清水に魚をもとめず口
ぐちをみてはなのゆるをもんるをもと祈ゆえ

おろしきてれき魚のゆえ清をもんや魚も魚をもこ
ゆえ名れ鰌もぐろつゆえ泥まぶれそあるうれも
らしこひて多ひ仕ぐらぬ

或人の云長者二代かといふを一代にてかぐるふ
いわゆる一生辛苦紙積て漸く富いてもて子孫
ふるあるをべいはしかく花車風流を家の驕る
出来く財寶と費て先て古人の行ふ所なる是
中れも町人い常の禄をけをい久く富貴とたも
ら雅しさうして驕つを不しかまして費て先ゆい
文の志紙やぐりうこうを道理をれいを不孝の罪む

物うし家財い先祖ちうそ子孫栄久のうよ貯へ置れし物なれい我身一分の業死よ費し者ふい大うう罪人ちうおのまま可ふうて又我子ふい讓うあうて子ふい先祖ちうれ預う物をうと先祖よう人と道理あう思逸孝行の筋一ちう書紙の無逸よう母稼穡よ勤労をれしも甚う稼穡乃艱難をちうれ乃逸して乃諺し既う誕ふしあういつまて先祖の貨財艱苦をけうれて安樂放逸をちうして終よ家業れや ぶ所事をいふ所ちうとちうり

或人戯て云ふくれ養うくれ養うくいうのい鬼ど為よ

有うやいうちう物ようふうとうしあうやといふ甚だ富ふ翁のあうしど我こうそうの寶物とおて今般く富ふう深く信じ給ひであうへどいふ甚人いうかうふいうる別の物よい行れ夫鬼ふうふい鬼神ふ横道かうて内心い正直なうものう祈ちうしくふんどうきう少人崇ふかうて公事よ出かうて故ふう所ふうかうれ養ときふ也我ふ著ちう横道ちうふ事れ祈ひて公事よ出て変ひいうくれ養よい紙ふ歌巾かうれ養よい木綿ちう物ふ故ふう漸く富ふう身ふ成ふう行ふう語し給し

或人のいつは大黒と福の神といつて萬人移い敬ひ此謂佛經に有るやうに我らの法さつとへ
ちらしたる是を信仰とるふ仏得あるいうかゝいつて
先大黒い色黑くかつけいきく形ちんあくし色黑さき
い姿黑のぶくろをもい肩ーもあけ短きい杖と議
ふ形ちう是に米穀乃信とつゝふ小財寶乃袋と
ふぎう同ゝくふ槌とそうそう人は身と歩ふ米穀
財宝を第一とす是紙風れてく世ちうこうにおこれ
足つゝはもあ字ふ人ーあ出の小槌い四民ゝもふ面
とゝう我くは家業職分の道是紙志づくもを

を放り事ちうれしの教ちうかくれてく勤行ふ所い
富貴に成りて千萬人をも救ふ是福の神乃
俗ちう世俗に板と云く造る處の大黒い霊
験あるとつい板い通ーうゝ紙西紙通ーて廣く方
民を渡ー日夜踊ゝとそ紙その板を以て造る
い是萬人に謙ゝ諸人の膝下にありそも終に身を
ゝて用紙達をんーし世ゝ仏く世ゝこうとつ紙ま人
ゝい板板にあゝ紙ゝもゝ方ゝん去神道者のいつ所い
世ゝ信仰とう大黒乃儀い日本大國神乃儀ゝ
ゝ佛説にいつう大黒ゝ大神ゝといつうゝいゝ

天竺にて摩伽迦羅天神といひて其神體和
らぎ像なり摩伽迦羅とは唐土の文字なり
飜譯すれば大黒天二字なり今世に用ゆる所
の形像は日本神道の大國神なりて天竺の大黒
天神よりおくれたるものなれば形像の
神は日本の人は饗宴めでて天竺姿にいたすと則
惠美酒神とも又は福神とも稱す土の
和語にて五穀萬寶は土より出る此故に大國坐國
の主なりとして萬物をうるおす是大なる福神
神なり小槌とは一寸法師なり幸ひ

うれしばば絶えざるものなれば乃ち幸と付
るものなりといふべし

武人の日月本正月の儀式は神代の風俗とうけして
清淨質朴なるを禮法とし松竹は直なる
姿常盤なる色を人は仏の直なる常あるを
志免し蓬萊のひさうの雜煮のもちゐは木具を器の
体像なるとて人をたふとぶ心ありて若き
をもてなしあるを是則天地の仁心考ふべしなり
れば切なる餘のまゝにけるなり簡素なるを七
日の雜水十五日は粥いづれも淡薄にして質素を

世日に小米をもつて赤飯とし歳の節の骨と費乃ちぐいみを費といひ是みな神代の遺風往古の美膳なる事を示して末代乃奢をこうぞけ〻れるものなりいつて

武人は云武篇は武業にして町人の正作なれば勇は町人にいつても武篇と勇とはまへあり町人は第一質朴を旨とすれば不自由に堪忍し外の名聞をもいつぞ出のく職分とはなして家業に退屈せざるは町人は男也武篇は勝負の利なれは町人は勇とぬしるべし

武士は主人を身と貴重し軍陣をはこぶ為に生る世なれば其志につとれを假初の夫婦なれ共武をもつて主人は名誉弧りわさるなり主人は此故に若命をいてても死を安くとべし町人は主人をすぐる母あり武篇の働さは不孝は第一也都て人間に生得乃剛臆を義あるは人は剛と義なれ人は臆を常にものゆえなるは如何なれはいやをもつけは安くして死なるべし是又義理乃勇者なれあれ死角町人にして生涯をこそ奉ぜれ武道のみをけとやらく他の一銭

色早怯なるいやしきて町人の武勇をれ恥くこそ
勇夫射御不違ともいへ我尚くい不敬し聖經をも
ふ〻ふ夫命はまくしいまるの惜きては天理自
然なりもるる紙いのち露ちりくも世をいはるて
いつるい義はいさみ血氣よ抜ちされる廣言なり
一体和尚乃辞世のごく今こそ死わるぶるれ
ゆれとめいひて何乃恥辱みも恥べくこれよい
ふ紙ちくしたるみとそて高上なる辞世をくする
事所人よいなくくもは莊子のいつるい生い天れ
吾紙労し死い天の吾と安んどくいつるしぬるく

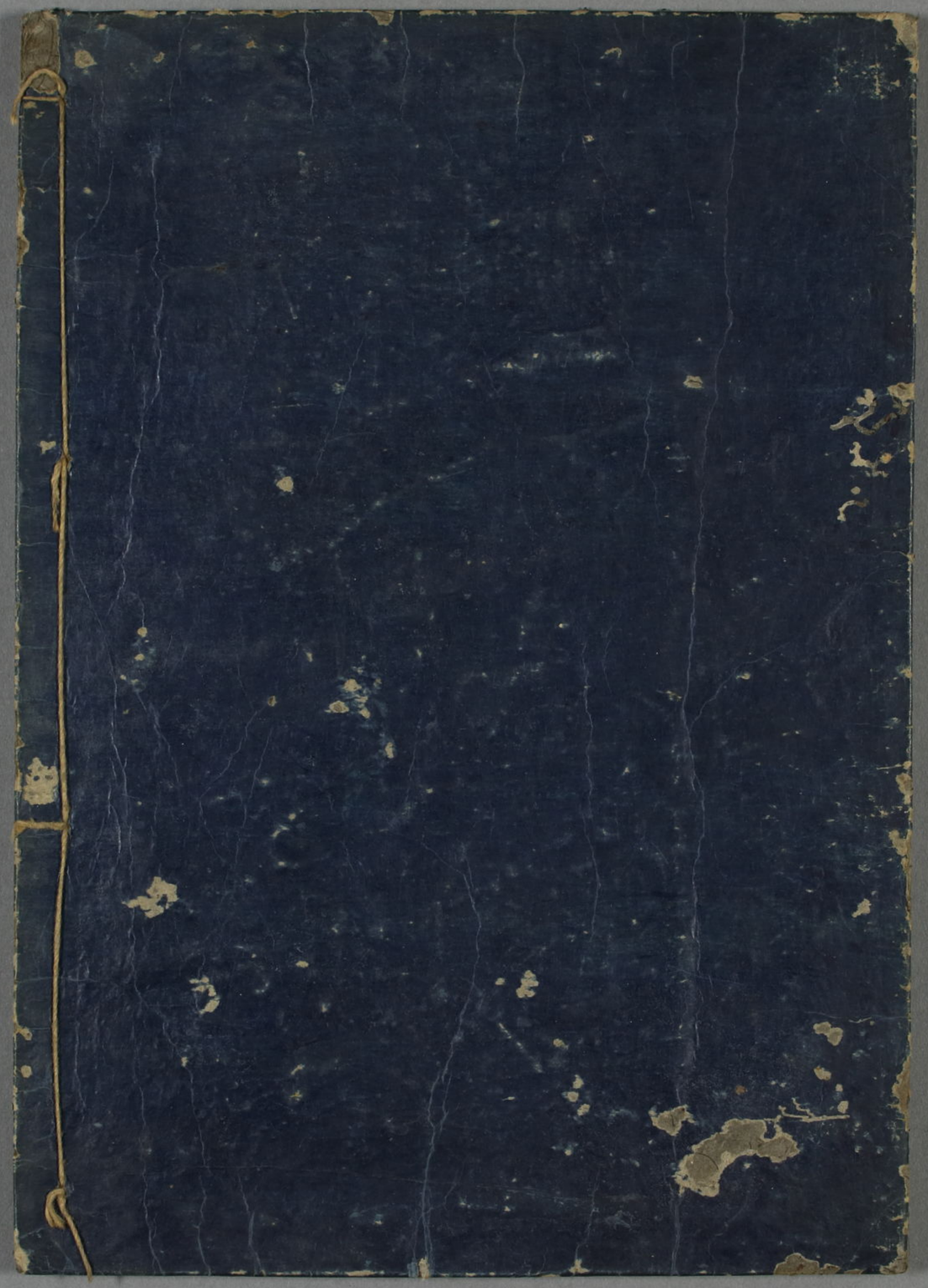
死と畏ろく人はもあよいつるものなりと諸くれし
或人乃咄よ富ち百姓のひとり子樂舞数寄して笛
をふれ習よ人くを扱も器用なる笛れとかしる又
一ふ所ひどていつるい我子の笛紙器用ありと各
誉れも我耳よいい富くもれ音色ふゆゆるり
いたに関てれ回ちふ人ちらくゆゆるいつる後
くいゆづれ用紙もうそるられ卯と恥べきわ
ゆをいひくちや又或富る所人れ子三味線を引
習ふるの文乃いくく汝ち三味線の音い我耳よ
わるを後しき孫ちよゆゆるそちんくちくと鳴

そいつさは行末は日傭とり風情にて世を送るべきものと眉をしかめて歎きくるしむ人こそ寄合て物語りもする中に人のうへを金くらべたるいちばんの老人方富貴なる人よりは寿命は福をく福あれば寿をし福寿ともに全き人は萬人の中にも有がたしとぞ申のくめりなる田舎人の言くさ中にも側より出くいつるは扨もあさはしきこと仏の御事なれば我住里にいたれば人をかたらひ物ゝ又なる者も不足なるさ果報人にそなはるといふ人は我

とりて七人といふは何程の分限ぞとこたへ問ふに銭三貫作りいふ業はいくらやくとこたへは八十俵にて用ゐ歯を堅固にして食もよく田植ふうえづアリて命も長く秋ものうちに多はまきてもまくものうちに俵にしかるるみ人を感じて世にふ富貴なる人なく欲い果なれものをれい人の富貴と義ひ事絶なるとなし是事と知れは貧賤なるこそも富りとしたる足事仏ものさるとなれい富りとこそも貧しと古人もいひをれし強ちなるれ奇にうへるる程と

学ぶべき所多し。しかるに四書五経をなをざりにして、あるいは文章にのみ目を付け、横ようゆくゆくまのあたりあるべき世渡りにのみ心を尽して、武学者はいとく町人は学問いたくて叶はざる物なり。されば学問の致しかたにて身の徳たるまた損ずるもかたくしろの心掛よく学ばざるまたはとくし学びてもその益大なり悪を学ばしめまいおく学ばしめるいかしき害なり。廣く学びていと大なる害なり。人なりの一とを二とせず学ばしめまい稽古修行の

の中なりて良人を集め見聞をもいて聖経を講談し或い輪講たぐく学ぶべきなり。講談して雑学に習ふべき学問なり。て一芸にして雑学にして人を高ぶんとなるものなり根本学問い音曲の芸者の如く雑学音楽ふるべきものなり。道理をきいろの事順ふるべい雑学にはなるべなくして何を聖経の理と雑学ふ邪ん。但口釋を仕ずいて物讃儒者なく浮世の役をさんとおもふ人い名利なり町人のなりを

きて町人の家職といふ事にいふ父母の家を出て
一向仕官俸禄の身となりての学問をこそ真の主
意なれ道理よりたゞ学問乃本意よりあれ
一人世風俗萬人よりはるものをれいいたゞくれく
世上の学問好風俗あるく家をすて学問をこそ乃
乃害とかりて新学に出故よ初学世志乃
ゆゑ所要なるゆゑなり町人の学問い別よ
又ちがふてあるといふ世し

町人嚢卷一終